

小学校社会科教育 実技・理論研修会 終了報告

テーマ	社会認識を深め、社会とかかわり続ける力を育む社会科学習の創造		
日 時	令和8年6月18日(木)		
会 場	石狩教育研修センター		
講 師	村越 含博 氏(北海道教育大学札幌校 講師)		
参加者	集合23名 オンライン20名 計43名		
研修会 の 様 子		本講演では、「社会認識を深め、社会とかかわり続ける力を育む社会科教育の創造—社会科授業の『問い』を現代的に問い直すことを通して—」をテーマに、北海道教育大学札幌校の村越含博氏より、社会科授業における「問い」の在り方や、社会認識を深めるための教材研究について、多くの実践例を交えながら講演いただいた。 講演ではまず、社会科の授業は教科書に示された知識を網羅的に学習するだけではなく、事実認識から関係認識、さらに価値認識へと段階的に社会認識を深めていくことが重要であることが示された。 具体例として取り上げられた上下水道の学習では、副読本等で扱われる「節水」の視点だけでは現代社会が抱える本質的な課題を十分に捉えられないことが示された。人口減少による料金収入の減少や施設の老朽化、技術者不足等、現在の水道事業が抱える課題を教材化し、「安全な水道を将来にわたって維持していくためにはどうすればよいか」という問いへ転換することで、子どもは社会の持続可能性について主体的に考えることができるという提案がなされた。また、上流域と下流域が一つの水系でつながっていることから、自分たちが使った水が他地域の暮らしにも影響を与えるという視点を取り入れることで、水を「自分たちだけの問題」ではなく、流域全体の課題として捉える学習の可能性も示された。 講演全体を通して繰り返し語られていたのは、「自分ごと」とは単に当事者へ共感することではなく、社会の構造や課題を理解し、それを自らも引き受けながら考えることで生まれるという考え方であった。教育者として、教科書の内容を教えるだけでなく、社会の変化を踏まえて教材を更新し、現代社会にふさわしい問いを設定する専門性が求められることを改めて感じた。 私自身も、授業では子どもが「知った」「わかった」で終わるのではなく、社会とのつながりや意味を考え、「自分ならどうするか」という問いへと発展できる単元構成を意識していきたいと考えた。そのためには、教科書の記述だけに依拠するのではなく、地域の実情や今日的な社会課題を教材研究によって取り入れながら、子どもが社会を多面的に捉え、社会とかかわり続ける資質・能力を育む授業づくりを進めていくことの重要性を改めて実感した講演会であった。	
			
			
			

